

図像／絵画・書をとおしてみた中村哲先生

永瀬, 克己 / Nagase, Katsumi

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

290

(終了ページ / End Page)

291

(発行年 / Year)

2004-08-10

(URL)

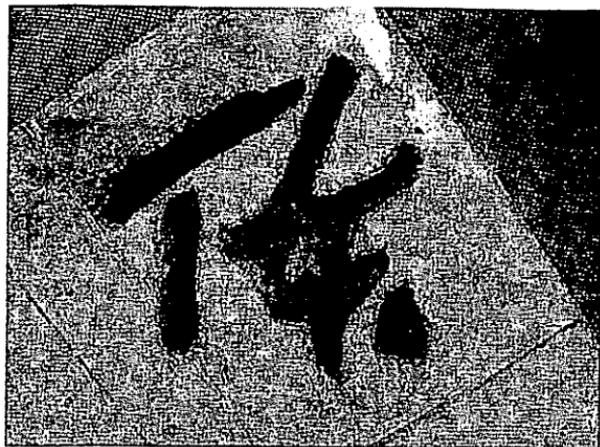
<https://doi.org/10.15002/00002620>

肖像／絵画・書をとおしてみた中村哲先生

永瀬 克己（法政大学工学部助教）

私と中村哲先生との直接の接点はありません。長く法政大学総長をされており、学生運動の盛んなとき総長としてさまざまな圧力に耐えながら頑張っておられる忍耐の人という印象を感じておりました。

昭和五〇年頃だったと思いますが、法政大学建築学科助手として小金井キャンパスに勤務しているとき、工学部体育館と付属施設を武者英二先生が設計することになり、それを手伝う機会がありました。体育館はプリミティブな空間構成と内部に曲線を用いた大胆な構造表現のものにまつまり完成を目前にしておりました。そのとき武者先生が、予算はないのだけれど表札を作りたいということで、まさに手作的にそれをつくることになりました。高さ一メートルほどのコンクリートの小さな柱を体育館入口前に立てるものでした。文字はどうするかということになりましたが、武者先生が総長に頼み、書いていただいたということでした。「体育館」というその文字は力強く、勢いで墨が飛び散っていました。それは竹筆を使って書いたとのことでした。その勢いを消さないように、慎重に文字をスタイロフォームに貼付け熱線で切り抜きコンクリートの型枠にセットしました。そしてコンクリートを打ち込むときがたいへんで、砂利が入ったものをそのまま流し込むとその文字が壊れてしまうのと、細かなところにコンクリートが廻らないということから小さなバケツにモルタルを取り、そのモルタルを爪楊枝を使って文字の隅々まで押し込んでいき文字全体に行き渡ったところを見計らい、残りのコンクリートを注ぎこみました。今だから明かしますが、ちょうど沈丁花が最も香るころでしたので、沈丁花の一枝を折り、その文字の後ろに入れました。コンクリートに打ち



竹筆による中村哲先生の書「体」

込まれていますのでその花は見えませんが私にとっては中村先生の書とともに沈丁花の香りが記憶とともに蘇ってきます。何も飾らない単純なコンクリートの表札柱でしたがもちろん見事な出来栄でした。

その後、武者先生と共に長く沖繩調査に関わり、その関係で沖繩文化研究所とも長いつき合いとなりました。昨年の一二月に法政大学沖繩文化研究所創立三〇周年記念特別展示として「沖繩文化研究所蔵貴重文献展」開催、そこに楚南家文書とともに中村哲先生の掛軸が展示されることになり、先生の書にまた出会うことができました。そこには書のみではなく墨絵が描かれており、私も墨絵を少々齧っていましたので先生の絵には大変興味をひかれました。やはり絵にも書と同様に力強さと描いているときの心情が伝わってくるようでした。先生のその軸を見ながら、私の好みで先生の絵と書のクローズアップを取り込み、この展覧会のポスターデザインをさせていただきました。間

接的ではありませんが先生の世界の一端に触れることができ幸せなことと思っております。

体育館表札の打ち込み実験のコンクリート片が、今でも私の研究室にありますので、そのタッチの残る墨跡写真をここに捧げます。